

登場人物

勝田 みどり(かつた みどり)

四十八歳。女手一つで一人息子の和喜を育ててきた。ぽっちゃり体型。関西弁。

勝田 和喜(かつた かずき)

二十六歳。親の脛をかじるみどりのダメ息子。母親とよく似たぽっちゃり体型。仕事が続かない。

間島(まじま) ヤクザのリーダー。逞しい肉体。

金髪パンチパーマ。

安藤(あんどう) 巨漢スキンヘッドのヤクザ。

グラサン。間島の部下。

是枝(これえだ)

極端に小柄なヤクザ。見るか
らに気味が悪い。間島の部下。

勝田みどりが仕事を終えて自宅のアパートに帰ると、何故か玄関の鍵が開きっぱなしだった。不思議に思いつつドアを開けたみどりの耳を、遠慮がちな音楽が掠める。テレビゲームのものらしきそれは、息子の和喜の部屋から聞こえてきていた。

「…ただいまあゝ。…和喜、どうしたん？今日は夜遅うまで仕事とちやうかつたっけ？なんや、はよ終わったん？」

息子の部屋の襖を開けて、みどりは訊いた。胡坐をかいて案の定テレビゲームに没頭していた息子は、みどりの方には一瞥もくれずに答えた。

「…やめてきた。…今日で終わり」

「なんやあゝ」

呆気にとられたような声が、みどりの口から

漏れた。トーンも文言も、哀しいほどに間抜けなものだった。状況に合っていなかったかもしれない。だが、息子の発言に対する彼女の偽りない感情が綺麗に反映されていた。いきなり想定外の事態に遭遇すると、人はこんな風に間抜けな姿を晒してしまうものだ…。

みどりが和喜を産んで間もなく、夫はよそに女を作って逃げた。それから女手一つで息子を育ててきたのだが、大学受験の失敗をきっかけに、和喜は部屋にひきこもってしまう。それ以来彼は孤立した生活を続けている。幸い社会と完全に隔絶されたような状態は長くはないものの、仕事を見つけてきても、てんで続かない。それまでアルバイト経験一つなかった和喜にとって、社会で普通に働くということは、相当困難なようだった。

それでも数週間前から勤め始めた工場は、彼

の性分に合っているようで、みどりはいよいよ安心していたのだが…。

「え？…ほんなら…もういかへんのか？あの工場？…あんた…この仕事向いてるって言うてたやんか…やのに…」

「…無理…人が…無理すぎる…」

和喜はコントローラーを握ったまま答える。

「…ほ…ほんならどうするん？…これから」

「…しばらく休む…家におる」

「……………」

もう二十六になる息子のありえない返答に、みどりは絶句してしまふ。そんな空気を察してか、和喜は取り繕うようにまくしたてる。

「…なにも、もう働かへんなんて言ってへんやん。ちよつと…ちよつとの間だけ…ゆっくりさせてえや…疲れてん…ほんま疲れてん…」

みどりは、息子の言葉に切実なものを感じ取

っていた。

「…そ…そうか…：…わかった…：じゃあ、また頑張りや…：」

みどりは息子の部屋の襖を閉じた。息子はテレビゲームを続けた。

「…はあ」

落胆を隠せないみどりの口から、大きなため息がこぼれる。みどりと和喜は、小さなアパートで二人暮らし。家計の全てはみどりが支えている。仕事は、スーパーで正社員としてフルタイム勤務。暮らしは、決して豊かとはいえない。

母親に似てぽっちゃり体型の和喜は、見た目通りの内気な性格で、仲の良い友達の一人さえいなかった。元来がそんな性質な上に、大学受験の失敗が彼の心の大きな傷になっている。

二十六歳にもなって自立出来ずに甘えたことばかり言っている息子を、本来なら厳しく突

き放すべきだろう。そんなことは百も承知だ。だが、大学受験に失敗した時の息子のいたましい姿を思い出すと、みどりは強い態度を取れなくなってしまうのだった。

「……………」

一時間ほど後、みどりは再び和喜の部屋の襖を開けた。そして、先程のみどりにとってショックすぎる出来事などなかったみたいにも、明るい声をかけた。

「…和喜、ご飯出来たで。久しぶりに一緒に食べようや」

和喜の勤めていた工場は、交番によっては勤務が深夜に及ぶこともあり、二人の夕食時間が合うことも稀だったのだ。その際、みどりは和喜のために弁当を用意していた。

「……………うん」

和喜は小さく言って、テレビゲームの電源を

切った。

居間の小さな座卓に向かい合って、二人は夕食を取る。肉じゃがと、味噌汁と、魚の煮付け…。

この六畳の居間と、同じく六畳の和喜の部屋とみどりの寝室。小さな風呂とトイレと台所。それだけの慎ましい住居だった。テレビは、和喜の部屋にしかない。

「まあ、また頑張ったらええやん。その内、あんたに向いてる仕事もなんか見つかるわ。…あ、この肉じゃが美味しい。自分で作つというのもなんやけど。おほほ」

みどりは気丈に振る舞い、懸命に息子を励ます。和喜はすぐには反応しなかったが、しばらく経ってから、控え目な声で言った。

「……お母さん」

「ん、なんや？」

「……………ごめん」

「……………うん」

みどりは小さく、しかしはつきりと答えた。

※※※

「勝田さんの息子さんって、もう独立したはるんでしたっけ？」

一日の業務を終え、更衣室で着替えている時だった。共にスーパーで働く同僚の久保田が、何気ない会話の流れの中で、そんなことを訊いてきた。

「え…いや…うちの子は…まだ家において…二人で暮らしてるんです」

「え？そうですか？あれ？…でも勝田さんの

息子さんって、もう二十五歳くらいとちやいましたっけ？」

無論、近年の息子の話を同僚にベラベラ喋ったりはしない。だが、昔から一緒に働いている久保田には、息子の大体の年齢は把握されていた。以前、彼女と息子の話をしていた頃には、将来こんな状況に陥るなんて思ってもいなかっただのだ。

「ええ…まあそうなんですけど…なんか実家の方が楽や言うてね…おかしいでしょ、うちの子？…恋人の一人も作らんでね…」

「いえいえ、そんなことないですよ。なにもおかしいことなんてないですわ。別に実家で親と一緒に暮らしてたって、そんな個人の自由なわけやし…すみません。なんかちよつと失礼な言い方になってしまいましたね。ごめんなさい、

勝田さん」

昨今の多様性尊重の風潮に配慮してか、久保田は素直に謝罪してきた。確かに、今時実家暮らしぐらいで殊更悪くいうものでもないのかもしれない。だが久保田もまさか、みどりの息子が仕事すらまともに出来ず、二十六歳で完全に親に食わせてもらっているなんて想定していないだろう。

「そんなそんな。全然。そんな、謝らんといてください、久保田さん」

なんとなく居づらくなり、その後の久保田との会話は早めに切りあげ、みどりは帰路についてた。

すっかり暗くなつた夜道を歩きながら、みどりの脳裏に去来するのは、同じ職場で働く久保田と自分との、哀しいほどの格差だった。

ちよつとしたことでわざわざ謝罪してきた久保田。元々の育ちの良さもあるのだろうか、

彼女の生活の余裕が、ああいった品の良い行動を生んだようにみどりには感じられた。

久保田には優しい夫がいて、二人の娘はそれぞれ大学で好きなことを勉強している。休みの日には、四人でよく遊びに出かけるらしい。

みどりと同じ四十八歳だが、化粧にもしつかり気を遣い、久保田はいつも綺麗だった。最低限の化粧しかする余裕がなく、髪もただ短くカットしただけのみどりとは大違いだ。そういえば、最後に美容院に行ったのはいつだっただろう。最近では体型を気にすることすらなくなり、お腹周りには醜い脂肪の塊がたぷたぷと揺れていた。

「あかん、あかん」

息子のことを悪く思いそうになって、慌てて首を振る。みどりは息子の現状を、否定したくなかった。和喜は苦しんでいるのだ。そして苦

しみながらも、なんとか頑張ろうとしている。そんな彼の背中を、笑顔で押してあげたい。

どんな人生でもいい。社会から褒めてもらえなくたっていい。ただ、生まれてきてよかった。生きててよかったと、思っていてほしい。それだけが、彼を産んだ母としての、みどりの願いだった。

「…ただいまあ〜」

「おかえり、お母さん」

帰宅すると、意外にも和喜は居間にいた。そして立ち上がり、みどりにあるものを渡した。

「はい、これ」

「え、なに？なんで？」

それはお金だった。一万円札ばかりで、数えてみると八万円ある。

「うそ？なに？どうしたん、これ？」

みどりは驚きを隠せない。前の工場をやめて

から約一月、和喜はずっと家において仕事なんてしていない。というかそもそも長く続けて働けたことがないので、こんなまとまったお金を家に入れたことすらなかった。無論貯金もないはずだ。

「ちよつとな、ネットで仕事始めてん。早速儲かったし、家に金入れるわ。いつまでも世話になつてばかりもいられへんしな」

いつになく饒舌に語る和喜。その得意気な表情は、実年齢より随分幼く見えた…。

和喜は詳しい説明をしようとはしなかったが、要はインターネットを使ってお金を稼ぐ術を見つけたということらしい。四十八歳のみどりにはいまいちピンとこない話だが、昨今そんな風にネットで仕事をしている人がいるというのはなんとなく知っている。このところ襖を開けると、息子はなにやら夢中になってパソコ

ンに向き合っていた。ゲームでもしているのか
と思っていたが、彼はちゃんと、前進しよう
としていたのだ…。

正直、胡散臭い気がしないこともない。だが、
どんな仕事だっていいではないか。家の中で
る仕事の方が、当人に向いているということだ
ってあるはずだ。

なにより、工場をやめてからずっと塞ぎ込ん
でいた和喜が、こんなにも嬉しそうな顔をして
いるのだ。みどりにとって、それに勝るものは
なかった。

感無量で、みどりは言った。

「…なんやようわからんけど…まあ、よかった
やんか、和喜。…頑張り。…お母さん、応援し
てるで」

「うん、頑張るわ」

目の前を覆っていた濃い霧が、一気に晴れて

いくような感じだった。もうこれでなにもかもがうまく回り始める。そんな気さえしていた。まさか、このことが、他ならぬみどり自身を想像も絶する地獄に導くなんて、考えもしなかった…。

※※※

幾分かの焦燥感を抱えて、みどりはスーパーからの帰り道を急ぐ。不穏な心のざわめきの原因は、先程更衣室で交わした久保田との会話だった。

なんでも、久保田の長女が、ネットを介した詐欺に引っかかったのだという。巧妙な手口で数万円も騙し取られたらしい。まあそれ自体は

今時よくある話なのかもしれないが、みどりの脳裏によぎったのは、和喜のことだった。

みどりにはよくわからない方法で、ネットでお金を稼いでいるという和喜。あれから一月が経ち、二度目の収入があつたということ、みどりはつい先日彼から十万円受け取っていた。息子の仕事が順調なようで喜んでいたが、ここに来て、俄然不安に襲われていた。

和喜がやっている仕事というのは、本当に問題ないものなのか。あの優しい子がまさか詐欺の類に手を染めていることはないと思うが、そうでなくても法的な部分はちゃんとクリアになっているのだろうか。個人がネットで行う仕事なんて、そういった危険と隣合わせだろうと思われた。

帰り次第、みどりは一度息子の仕事について詳しく聞こうと考えていた。これまで軽く尋ね

てみても、和喜は適当にはぐらかすばかりで全然教えてくれなかったが、そろそろそんな訳にもいかない。そして、どんな仕事をしているのかちやんと知った上で、彼をサポートしたいとも思った。これまでにない新時代の仕事なら、きっと一人では抱えきれない困難もでてくるだろう。母として、貸せる力は極力貸してあげたい。

そんな思いを胸に、みどりは早足で安アパートに帰宅した。

だが。

「ただいまあ〜」

「おう。やっと帰ったか。随分遅かったやんけ。おかえりなさい、お母さん」

彼女に出迎えの声をかけたのは、息子ではなかった…。

「え…」

みどりは愕然として言葉を失う。居間に、知らない人間が三人もあがりこんでいた。やけに逞しい体つきの金髪パンチパーマの男……。厳ついグラサンをかけた巨漢スキンヘッドの男……。成人男子にしては極端に小柄な薄気味の悪い男……。三人とも、入れ墨のような物騒な模様が施された、悪趣味なアロハシャツを身に着けている。

一目見て、その道の人間とわかる男達だった……。

「……………」

しかも、みどり達が生活する居間に、彼らは当然のように土足で踏み込んでいた。そしてどういうわけか、その足元に、身を縮こめて土下座している息子の和喜の姿……。

「…あ…あの…ど…どちら様ですか？」

この状況の第一声としては、いささかピント

外れかと思われた。だが、予期せぬ事態に動揺を隠せないみどりは、そんな定型文を絞りだすのがやつとだった。

リーダーと思しき、金髪パンチパーマの男が答える。

「どちら様：か？ま、お宅の息子さんに多大な損害を負わされたもんってところですかね？」

「え：」

みどりの全身が、ふっと冷たくなる。

リーダーの男は続ける。

「お母さん：なんか最近、息子さんが不審なお金を手にしてる感じなかったですか？」

みどりはドキリとする。和喜が新しく始めた仕事のことを言っているのだろうか。

「あ、その顔は心当たりあるんやね。：お母さん、実はそのお金ね：息子さんが不正に手に入れたものなんすよ：あたしらの権利を思いつ

切り侵害してね」

「……………」

口をあんどり開けてみどりは聞いていた。

徐々に、心臓が早鐘を打っていく…。

「息子さんがなにで金稼いでたかっていうとね…AV、あるでしょ？エロビデオですね。スケベビデオ…。それをネットのダウンロードサイトにアップしてね、それ売って儲けてたんすよ、お宅の息子さん。勿論、そのAVは作った人のもんですから、勝手にそんなことしたらあかんわけです。著作権っちゅうもんがありますからね。でもね、大昔のAVで、誰も聞いたこともないようなインディーズの怪しいメーカーが作ったAVがこの世にはぎょうさんあってね、そのメーカーもとうに解散してみんなバラバラになっててね、権利者が一体誰なんかよくわからんようになってるっちゅうことが

往々にしてあるんですわ。しかもそんなインデ
ーズのヤバそうなメーカーが作ったAVで
しょ？内容も今では到底お目にかかれへんよ
うなヤバイやつでね、しかも中々手に入らへん
からプレミアもついてる。よってマニアから非
常に需要がある。だからそんな大昔のAVを
元々持ってたコレクターがね、動画だけ抜き取
って勝手にネットでダウンロード販売したり
しよるんですよ。権利者が誰かわからんよう
になってるから、訴えられることもないっちゅう
ことでね。世の中には知られてへんけど、そん
なんで儲けてる悪い奴等がこの世にはぎょう
さんおるんですわ。とんでもない奴等でしょ？
人のもん勝手に売って儲けてるんですからね
…息子さんも、きつとそれを真似したんでしょ
うねえ」

「……………」

開いた口が塞がらなかった。全く想像外の話だった。そもそもAVだなんて、みどりの人生と縁がなさすぎて、それについてなにかを考えただことすら一度もない。

「大概はそういう連中の思惑通りね、そんな悪いことしても訴えられること、ないんですわ。権利者が誰なんか本人らもわかってへんくらいですから。でもね、そんな風にもう潰れたように見えても、著作権の管理だけはちゃくんとやってるとこもあるんですわ。…それがうちの会社ですわね、お母さん。うちの会社、色々手広く商売やらしてもうてるんですけどね、その中の一つで昔インディーズAV作ってて、今はもうやってへんし、メーカーの名前もすっかり世から消えてわかりにくいんやけど、過去のAVの権利だけはがっちり守ってるんですわ。…もうお察しですよ、お母さん？…お宅の息子

さん、他の潰れたメーカーとおんなじやおもて、うちの会社のAV、ネットに勝手にアップして販売しよったんですわ。これ、どういうことかわかりますか？…犯罪ですわ。通報されたら即手錠かけられますし、民事訴訟起こされたら損害賠償払わなあきません。…息子さん、そんなとんでもないこととしてしもうたんですわ、お母さん」

「……………」

膝がガクガクと震えていた。あまりに絶望的な事態に、目の前が真っ暗になりそうだった。だが、とにかく今すべきことをせねばならない。みどりは黙って土下座を続ける息子の隣に並んで膝をつき、自らも畳に額をつけた。

「…も…申し訳ありません……息子がそちら様の著作物を販売して得た収入…速やかに全額お返し致します…だから何卒…」

「ははは。お母さん、著作権侵害ナメたらあきませんよ。息子さん、うちのAV勝手に動画にして販売してるでしょ？これっでもうネットにバラまいてんのと一緒なんですわ。この先どれくらい流出してまうかわかったもんじゃない。売った分の金をそのまま返せばええって話じゃないんです。それ以上の損害を確実に与えられてるんですわ、こっちは。：聞いたことないですか？ファスト映画ちゅうてね、映画を勝手に縮めてネットにアップして捕まった連中。確か数億円規模の損害賠償請求されましたわ。：それくらい補償してもらわなね、割にあわんですわ。：。。。ほな警察に、通報させてもらいましょか」

「ああ：」

みどりの口から、間抜けな吐息が漏れる。確かにそんなニュースを聞いたことがある気が

する。みどりは気が動転して、突拍子もないことを口走ってしまふ。

「ああ…すみません…ホントにすみません…それだけは…け…警察だけは…ああ…ゆ…許してください…この子…大学受験に失敗してそれからひきこもって…ああ…ほんまに苦しんで…中々ちゃんと働けなくて…それでも頑張ってきて…だから…ああ…どうか許してください…それだけはどうか…」

「なはは！なに言ってるんですか、お母さん。そんな事情こっちは知りませんわ。それにどんな過酷な状況に置かれてたとしても、悪いことしたら罪を償わなあかんのが、人間っちゅうもんでしょう？…でも、まあ…息子さんの代わりに…お母さんが償ってくれはるっちゅうなら、それでもええですけどね」

「え…」

思わず、みどりは顔をあげていた。金髪パンチパーマのリーダーは、上からその目をぐっと覗き込んで言う。

「…ふふ…先に息子さんと話しててね…お母さんと二人で暮らしてるいうから、実はあんたの帰りを待ったんですわ、あたしら…息子さんは自分勝手な行いでうちのAVの権利を侵害したわけでしょ？だから、それに一番見合った罪の償い方を、他ならぬお母さんがしてくれはるいうんやったら、通報も、民事訴訟も、なしにしてあげてもええですよ？」

「はあ…わ…私は…な…なにをすれば…」
藁にもすがる思いでそう問いながら、みどりは嫌な予感に包まれていた。

ヤクザのリーダーは言った。ギロリ鋭い眼光で、みどりの瞳をじっと見据えて。

「…息子さんが不正にアップしたうちのAV

とおんなじことを……お母さんがしてくださ
い」

「!!!!!!」

みどりは、全身が一瞬で氷のように冷たくな
るのを感じた……。

ダメニート息子の身代わりになって
息子の目の前で

ヤクザに滅茶苦茶に犯されまくった
関西弁ぽっちゃりお母さん

035

この作品はフィクションです。

実在の人物・団体・事件等とは関係ありません。
また、登場人物は全員十八歳以上です。

『ああ、大丈夫、大丈夫。うちはもう販売はや
ってへんから、撮影はしませんわ。ただ個人的
に、お母さんにAVとおんなじやらし〜ことし
てもらおうってだけで。もし了承してくれはる
んやったら、明日の昼一時にうちの事務所に二
人で来てください。…ここですわ。もし来えへ
んかったら…息子さん、速やかに通報させても
らいますんで。…まあ、一晩よー考えてくださ
い。なははは』

「……………」

みどりは、数分前の金髪パンチパーマのリー
ダーの言葉を思い出していた。その言葉を最後
に、靴のまま居間に堂々とあがった三人の男達
は帰っていった。膝をついたまま呆然とその姿
を見送るみどりの視界に、巨漢のグラスサンスキ
ンヘッドの男と、異様に小柄な不気味な男の姿

が入った。やたら逞しい胸板を誇るリーダーも合わせて、改めて彼らの全身から迸る禍々しさにみどりは圧倒されていた……。

「……………」

「…………お母さん……ごめん」

居間の座卓を挟んで向かい合った和喜がボソリと言う。本来なら夕食の時間だが、座卓にはなにも並んでいない。お互いに、とてもそんな気分ではなかった。母子は二人して、ただ居間の古い畳に腰を下ろしていた。

「…………和喜」

息子は哀しいほど悄然として、がっくり肩を落としていた。みどりには、そんな彼がとても憐れに思えた。息子がしていたのは、仕事でもなんでもなかったのだ。それどころか、不正な犯罪行為……。やっと思子に向いている仕事が見つかつたと馬鹿みたいに浮かれていた自分自

身も、ひどく滑稽だった…。

「……ゴクツ」

唾を一つ飲み込んで、みどりは言った。

「…今回は……お母さんがなんとかしてあげるから……けど……ほんまに……もういい加減ちやんと働かなあかんで…」

「…わかった……ごめん…」

「うん…じゃあ…もう心配しんとき…」

息子にはそう言ったものの、みどりは決して腹をくくったわけではなかった。明日、自分が一体どうなってしまうのか、不安でしようがなかった…。

※※※

翌朝、スーパーに欠勤の連絡を入れたみどりは、昼前になってから息子と共に約束の事務所に向かって出発した。家を出る前に、いつになく入念に化粧もした。それは無論、単なる社会常識のつもりだったが、なにか性的な意味での準備のように思えて、神経がざわっと粟立つ気がした。

「おお、来たか。待つとつたで。中入れや」

マンションの一室である事務所のインターホンを鳴らすと、金髪パンチパーマのリーダーが中からドアを開けた。彼は間島と名乗った。

みどりと和喜は、応接室のような部屋に通された。十畳ほどの空間で、中央に置かれたガラス製のテーブルを、高価そうな革のソファアークが挟んでいる。そのソファアークの後ろに、昨日の巨漢スキンヘッドのグラサンと、薄気味悪い小柄な男が直立で待機していた。

「……ゴクッ」

三人のチンピラは、昨日同様極悪な柄のアロハシャツを着用していた。揃って三十代くらいと思われる。恐らくここは間島の個人事務所のようなもので、彼らが所属するヤクザ経営の会社はもつともつと巨大な組織なのだろうが、今回の件に関しては、きつと間島たちに一任されているのだろうと思われた。

みどりと和喜は促され、ソファアに腰を下ろして間島と対峙する。

「……あの……この度は本当に申し訳ございませんでした……これ……息子がしてしまったことの補償と……謝罪の意味を込めまして……」

フォーマルなジャケットとタイトスカート姿で、服装でも誠意を表してきたみどりは、中がパンパンになった封筒をガラステーブルの上に置いた。お金だった。百万円以上ある。今

用意出来る最大の額を、来る途中銀行でおろしてきた。正直、これでなんとか許してもらいたいという気持ちがあった。

だが。

「ああ、ええよええよ、そんなん。昨日も言うたけど全然足らへんし。いらんわ。そんなことよりほら、はよこれに着替えろや」

間島はそんなみどりの魂胆を一蹴し、ソファーの脇に置かれていた紙袋からあるものを取りだして彼女の眼前に突きだした。

鮮やかなグリーンのも、ビキニの水着だった。

「ぐっ…」

「…息子を逮捕と訴訟から救う唯一の方法は…お母さん、あんたが息子がアップしたAVとおんなじいやらしいことをして、俺らを満足させること。もうそれしかないねん。…それを覚悟で今日はここへ来たんやろ？」

間島は冷酷な口調でみどりを問い詰める。昨日とは、言葉遣いが一変していた。自ら事務所を訪れた以上、みどりはもう彼の支配下だといわんばかりだった。

「……………」

「ふふ…まあ今日だけってわけにはいかへんけど、なんべんか俺らの言う通りにしたら、ほんまにチャラにしたる。息子が俺らに負わせた数億の損害、全部な。それは約束する。…AVの事業な、うちの会社の中でもうそんなデカイ部門ちゃうから、俺の一存でどうにでもなるねん。だからお母さんが腹くくるだけで、ほんまに息子の罪を水に流すこと出来るんやで？な
あ…もう覚悟決めえや」

みどりは。

「……………わ…わかりました」

微かに震える声でそう答えていた。数億とい

うのはさすがに誇張だと思うが、息子がしたことは重い犯罪には違いない。みどりは昨夜ネットで調べてみたが、それはどう頑張っても覆りそうになかった。もう、こうする以外にないのだ…。

「…わ…私は…その…ゆ…：…言われる通りに致します…はあ…ですが…あの…息子は…もう帰してもらってもよろしいでしょうか…」

みどりは言った。実はそのことがずっとひっかかっていた。彼らのターゲットはもはやみどり一人で、和喜は今日ここに来る必要すらなかったはずだ。

だが、間島は信じられない返答をした。

「なに言うてんねん。息子に見せるに決まってるやんけ。自分が不正に利益を搾取したAVとおんなじことをお母ちゃんがやらされて、それを眼前に思い切り突きつけられる。それが息子

への罰なんやから」

「なっ！！！」

鈍器で後頭部を殴打されたかのような衝撃だった。思わず隣に座る息子を見ると、視線を落としてぶるぶると震えていた。

「息子の知らんところでお母ちゃんがエロいとされたところで、息子に対してはなんの罰にもならへんやんけ。そんなんおかしいやろ？この息子めちゃめちゃ悪いことしたのに」

「あ、いや、でも、その…あの」

「おら、とつとつと着替えてこい！安藤、是枝！このおばはん連れてって、無理矢理エロ水着に着替えさせろ！」

「…へい」

「くしゅしゅ…」

「いや、ちよっ、ちよつと待って！」

意見も抗議も許されず、間島がソファア―の後

ろに立つ二人の舎弟に命令し、みどりは彼らに強引に立ち上がらされた。そしてそのまま別室へと連行される。

三十分ほど後、再び応接室のドアを開いたみどりは、年甲斐もない鮮やかなグリーンのビキニ姿に変身していた…。

「おほお！ええやんけ！やっぱ俺が予想した通りごつつエロい体してるやんけ、このババア！」

「ぐっ…」

二人のヤクザに挟まれてソファの前まで歩きながら、みどりの口からやりきれない吐息が漏れる。それは、四十八にもなるおばさんが、普通身に着けるような水着ではなかった。そういう撮影専門のものなのか、布面積がやたら小さく、みどりの豊満なおっぱいの肉も、巨大なお尻の肉も、ほぼ剥き出しになっている。それ

に加えて腹の周りや太腿に醜く付着したぶよぶよの脂肪の塊まで無惨に晒してしまつているのだ。顔から火が噴きでるほどの恥ずかしさだつた。両手を伸ばして全身を少しでも隠そうとするが、まるで用をなさない。

（ああ…恥ずかしい…恥ずかしい…あかん…
こんなんあかん…絶対あかんわ…）
しかも…。

「はあ…んん…」

みどりはソファ―に目を向けた。すぐそこに、ずっと二人で暮らしてきた息子がいるのだ。和喜は憔悴した感じで目を伏せてこちらを見ようとはしないが、こんな姿を息子に見られて平気でいられるわけがなかった。

（…はあ…和喜…見んといて…お願いやから見んといて…お母さんのこんな姿絶対見んといて！）

「おい、ババア！なに隠しとんねん！隠したら意味ないやんけ！腕下ろして水着からはみ出たやらしい乳の肉見せんかい！」

「くっ…んん…」

間島は恐いほどの強い口調で言うが、おいそれと従えるわけはなかった。みどりは依然両腕でしつかりと女の大事な部分をガードしている。すると、間島は。

「なんや！言う通りにできひんのか、われ！ほなええわ！好きにせい！今すぐ息子通報させてもらうさかいに！安藤、電話貸せ！」

「はあん！ま…ま…まって…ああ…ま…待ってくださ…い…ゴクツ…い…言う通りにしますから…」

そのカードを切られると、みどりはもうどうすることも出来ない。観念して静かに両腕を下ろし、気をつけの姿勢でその場にじっと立った。

(…は…は…：…恥ずかしいいいいいいいい！！！！)

着替えの際、安藤と是枝は更衣室には入らなかつたので、裸を見られるようなことはなかつた。従つて、決定的な形でこの姿を晒したのはこれが初めてだつた。四十八歳のお母さんのだらしない半裸の肉体が、男達の性的な視線の餌食になつてしまふ。

「はあ…くっ…んん…」

みどりの口から、普段決してださない謎の吐息が漏れる…。

「ぎやははははは！ええやんけ、ええやんけ！めっちゃエロいやんけ！無駄に乳デカくて最高や！だらしない脂肪のつき具合も俺的にごつつそそられるしな！にしても、ええ歳してなんちゆう水着きとんねん、ババア(笑)！羞恥心とかないんか、お前？まあ、俺が着せとるんや

けどな(笑)！なはははは！…おい、息子！なに
目え伏せとんねん！ちゃんと見んかい！お前
のアホな行為のせいでお母ちゃんこんなひど
い目に合わされてんねんぞ(笑)！そのいじら
しい頑張りをちゃんと見たらんかい！」

「ひいっ！」

向かいのソファーに座るヤクザに凄まれ、和
喜はビクツと肩を震わせる。母親同様大人しそ
うなぽっっちゃり体型の息子は、恐る恐るといっ
た様子で視線をあげる。

「…ゴクツ」

「はあ…んん…」

(ああ…和喜…見んといて…お願いやから…
もう見んといて…)

「あはは！ちゃんと見とけよ！絶対視線下げ
んとしつかり見とけよ！これからお前のお母
ちゃんがさせられるえげつないこと(笑)！他

ならぬお前のせいできせられるんやからな！」

二十六歳の内気すぎるひきこもりにとって、ヤクザの言葉に反抗するなんて不可能だった。直視は出来ずとも、決して視線を落とすことなく、目を泳がしながら息子は母の恥ずかしい姿を視界に入れ続けた…。

(はあ…やめて…ほんま見んといて和喜…)

「にやはは！ほな、いこか！息子が不正にアツプして金稼いだエロビデオとおんなじこと！お母さん、やってみよか！まあ、まるつきり全部同じにする必要はないけど、実際映像見てなんとなくニュアンスは掴んでるやろ？それを全力でやって、息子の目に思いつ切り突きつけたれ！母親として、息子に自分のやったことの責任を味合わせたれ！ほらいけ！お母さん！」

「くっ…」

みどりは先程更衣室で、和喜が不正に販売し

たというAVの内の一本の、ダイジェスト映像のようなものを見せられていた。台本をそのまま再現するのではなく、そのAVの象徴的な要素を、母に演じさせる。この辱めこそが、彼らの目的らしかった。

「ああ：ゴクツ：」

(：我慢：我慢や：我慢やで：みどり：)

四十八歳のおばさんは覚悟を決めた。こうするしかないのなら、腹をくくって早めに終わらせてしまった方がいい。どうせ、もう逃げられないのだ。

肩幅に足を広げてしっかり立ち、両腕で下から抱えるように豊満な乳房を持ち上げ、若干前屈みになってそれを強調し、口を開く。

ついさつき見たAVの中にあつたセリフを、見よう見まねでなぞる…。

「はあ：あ：あたし：…え：エッチ大好き：